

真宗生活入門講座 II

仏教をめぐる対話

山邊の文とくわの教論

目次

一、人生の意義	1
二、宗 教	25
三、神 と 仏	47
四、浄 土	69
五、念仏と信心	91
あとがき	113

一、人生の意義

青年A・Bと住職Tとの対話

この章の問題点

われわれはさまざまな問題に悩み、その解決に苦しみます。われわれの人生はその問題の場です。問題をごまかさず、悩みを逃避せずに真剣にそれらと取り組んでゆこうとすれば、必ずわれわれ自身、人間存在が問われてくるとともに、人生の意義ということにぶつかるでありません。

それを明らかにすることによって、いろいろな苦悩の根をつきとめ、問題解決の正しい方向を見いだしてゆくことができるのではないかとというのが、本章のねらいであります。

A 私は仏教青年会に入会してまだ間がないのですが、いろいろ教えられられることも多く、入ってよかったと思っています。ただ仏教の話はちょっとむずかしくて、何かしら現実と離れた話のように思えるのです。

T そうですか。聞き方にもよりますが、話す方にも大いに責任があるのでしょうか。しかし、はっきりいえることは、仏教は決して現実と離れたものではないということです。むしろ現実そのものを問題としているものです。

A 実際に私どもが困っている問題に対して解決を与えてくれるものですか。

T そうです。根本的な解決を与えてくれるのです。しかし、その問題とというのがいろいろあるでしょう。

問題の解決

1. 人生の意義

B 私は大きな理想を持って青年団長をやっているのですが、思うようにいかなくて、このごろはおもしろくありません。また家庭でも、両親、嫁、私のあいだにいろいろ意見が異なっていて悩んでおります。どうしたら生きがいのある日暮らしが見つかるのでしょうか。

A 同じようなことですが、私は世の中の人の喜ばれることに身を捧げるのが自他ともに幸福になる道と信じて、いろいろな仕事に奉仕させてもらっております。ところがいつも自分の家をあけていますので、仕事が進まないと家の人から苦情が出て、いま板ばさみになって悩んでいるのです。

T 理想と現実の矛盾ですね。本当に人はそれぞれにさまざまな悩みをもっています。貧乏の苦しみ、病気の悩み、あるいは恋愛の問題などは、

ことにあなた方にとって切実な悩みでしょう。その個々の問題に対して、こんな場合にはこう、と公式的な答えを用意しているのが教えではありません。辞書を引いて解答を見つめるようなわけには人生はゆきません。一つの問題が解決したと思うと、その解決したところからすぐ次の問題が起こってくるのです。

A そうすると死ぬまで解決はないということですか。

T われわれが生きているということは、問題をもっているということではありませんか。そこで考えなければならないのは、私どもが悩んでいる直接の問題は、人生における問題であるということです。人生における問題は、無数にあります。その根になっている人生そのものを問題にするところから、先に申しました根本的な解決の緒が見いだされてく

るのです。

人生とは

B 私など、お寺にお参りするお年寄りから「どうせこの世はこんなもので幸せも何もないのだから、未来の幸せを待つより仕方がない」とよく聞くのですが、人生はこんなことで終わってしまうのですか。

A 娑婆しゃばだから、とよくいいますね。

T 娑婆しゃばというのは、苦勞の尽きないところといった意味ですが、これが誤解されていますね。

A “どうせ娑婆だ”というのは嫌いやなことばです。進歩も何も出てこない。“どうせ”というのは何かしらうわべは捨てながら、内では捨てきれないでいるといった感じがします。

T そうです。お寺にお参りしたらこの“どうせ”がなくなるのですよ。

苦惱の絶えないところが娑婆ですが、娑婆が苦しめているという前に、その娑婆は誰が作っているかというのが問題です。

A 私ども、一人ひとりが作っていますね。

T ですから、はじめからそんな世界があって、私が苦しめられるのでなくて、私がどう世界を感じとり、どう作っているかということになるのでしょうか。自分を抜きにして考えるから娑婆は苦しいといのです。結局、問題は自分に返ってきます。さまざまに苦しいとか悩むとかいっているそのもとは、自分の始末がつかないということに関連してくるのです。その自分が明らかになり、自分をとおして人生がつかめると、おのずから見方が変わってきます。

B このあいだも、われわれは働くために生きるのか、生きるために働く

1. 人生の意義

何のために
生きるか

のかと討論をしましたが、結局、それなら何のために生まれてきたのかということになって、わけがわからなくなったのですが。

A 生まれてきたから、生まれてきた……。

T そう、それにちがいない。ときどき親が勝手に生んだのだから私は知らないということを聞くのですが、それは生きがいが見つからないというと同じですね。

B それでも「仏法を聞くために生まれてきた」とは、なかなか思えないのですけれども……。

T 無理に思い込まなくていいのです。何のためにと問うことの前に、まず自分が生きているという事実は確かですね。生きていることの背景には、いろいろな力のおかげとありますが、それもしばらくお

いて、とにかく生きたいから生きたいのであり、生きたいことには理由はありません。

B それでは生きるために働くのであって、働くために生きるのではないのですか。

T あなたの仕事は農業でしたね。何のために精を出してお米やお芋や野菜を作っておられますか。

B ……。人に食べてもらうということもありますが、やはり自分たちが食べてゆき、よりよい生活ができるようにとやっています。

T どの職業でも人間は働かなければ食べてゆけません。実際、私どものやっていることは、こうしていかなければ生きていけないということが基底にあります。恥ずかしいことですが……。

A 恥ずかしいことでしょうか。よりよい生活、よりよい社会を築くために生きて働くのですから、私はそう思いませんが。

T そう、それもわかります。世界はそれによって進歩してきたのでしょう。「一日作なさざれば一日食わず」と昔の人もいつておりますし、近ごろは「働かざる者は食うべからず」ともいいますね。それはもちろん大切なことであり立派なことであるのです。が、しかし、また一方では働かねば食えないという現実もどうすることもできない。この一面があることは否定しきれない事実です。私の頭のあげられない事実なのです。社会のためとか何のためとかと、どんなに立派なことをいったり、したりしていても、その底において、自分というものから離れられないという、この矛盾をどうするかが本当の問題点ではありませんか。

A と、いますと……。

問題の根

T 先ほどから出ていた家庭問題にしても、理想と現実の矛盾にしても、我が中心になり、自分が捨てきれないところに根があるのでしょう。社会奉仕は大切なことであっても、それになりきるならば問題はないけれども、はたしてそのために自分を捨てきれませんか。家庭、ひいては自分が捨てきれない悩みが出てくるので、私もどこまでも自分を中心とした立場から離れることができません。自分が一番かわいいのです。

A 人を愛するということは第二というわけですか。

T 人間の立場で本当に愛することができるのでしょうか。人を愛するといっても、その相手の身になって、相手のために相手を愛するのではなく